

報告書

山下教授ミンスク訪問・サンクトペテルブルグ卒業教育医学アカデミー125周年記念行事
2010年6月8日(火)～6月11日(金)

長崎大学大学院国際健康開発研究科2年
増永智子

今回、山下俊一先生がベラルーシのミンスク及びロシアのサンクトペテルブルグへ訪問されるに当たり、先生と同行する機会を頂いた為、以下の通り報告致します。私は現在国際健康開発研究科修士課程2年生として8カ月の海外研修をここミンスクにある長崎大学海外拠点を中心に開始したところです。現地常駐の高橋純平助教が調整官として通訳も兼務されました。

■ミンスク

6月8日(火)

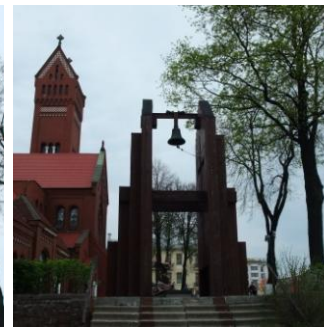
- 山下先生、フランクフルト経由でミンスクへ到着。
- ベラルーシ卒業教育医学アカデミー(BelMAPO)の Demidchik 所長との各種協議と協力関係強化の為のメモランダム署名が行われた。
- Prof. Daniliva とのミーティング(Prof. Drozd もスカイプで参加)
甲状腺疾患センターや今後の共同研究、連携の展望について意見交換を行った。チェルノブイリ事故後の研究、甲状腺疾患の研究の成果について、ベラルーシ国内だけではなく、広く世界にアピールしていく重要性が強調された。具体的に国際甲状腺学会パリでの発表と準備が協議された。
- 赤の教会訪問

赤の教会には長崎の鐘を寄贈した経緯があり浦上天主堂と縁のあるカトリックの教会である。

神父との会談の中で、赤の教会が今年の10月に20周年を迎え式典が行われることが分かり、長崎からも是非祝福したい意向を告げた。またポポフ氏ら30名の一団が長崎を訪問する予定である。

会談の後は女性コーラス隊の練習風景を見学させていただき、心が洗われるような素晴らしい歌声を聴くことができた。

今後も学術協定のみならず、宗教や歴史的背景、文化的な側面で都市同士の交流が継続し、強化されていくことが望まれる。夜は元在ベラルーシ日本大使森野善郎氏らとの会食会で意見交換を深めることができた。



寄贈された長崎の鐘。

6月9日(水)

以下3施設を山下先生、高橋氏とともに訪問した。

- ・ Belarusian Branch of Russian-Belarusian Information Center (BORBIC) 訪問
- ・ ベラルーシ国立医科大学訪問
- ・ 在ベラルーシ日本大使館訪問

【BORBIC】

BORBIC はチェルノブイリ原子力事故の影響の様々な分野における情報・知見の集約、彼らの言葉を借りれば「経験の Capitalization」を目指して 2007 年にチェルノブイリ事故影響除去局の下設立された、ロシア・ベラルーシインフォメーションセンターのベラルーシ支部である。

以前より私のメンタルヘルスについての研究に理解と協力姿勢を示してくれている。今回山下教授の訪問では、Zoya 所長始め、Borisevich 副所長、Sobolev 情報・分析部長、Danilenco 国際協力部長の 4 名とお会いし、BORBIC と長崎大学・長崎との連携の可能性、及び今後の私の研究について双方の意見を交換した。

BORBIC は 1. チェルノブイリ事故関連の様々なデータベースの統合、2. チェルノブイリ事故に関する国の実績の世界に向けたアピール、3. 放射能高汚染地域との連携による事故影響の克服、という三本柱でプロジェクトを行っている。

こうした説明を受けて、山下教授より医療分野での人材交流や、原爆資料館や原爆犠牲者追悼平和祈念館のデータベースの活用、すでに長崎との交流のあるスタンフォード大学や UCLA での平和教育プログラムとの連携、国連のチェルノブイリ info やジュネーブにある NGO「チェルノブイリ友の会」との連携の可能性などが協議された。

私の研究については、当初のアンケート調査研究案が保健省より却下されたことを受け、BORBIC 内でその理由や今後の可能性についても色々な検討をして頂いたことを知った。長崎大学としては、私の研究を最優先課題に据えて今回の問題に取り組むということは不可能であり、言葉の壁、専門性の課題、実現能力などの現状からは研究デザインの変更が現実的な策ではあるが、BORBIC の方々の協力的な姿勢に感謝したい。

チェルノブイリ事故から 25 周年の来年は、EU 諸国に向けたアピールを目指しているという。24 周年の記念行事としてベラルーシ全土の子どもたちから募集した絵や、関連する写真などを活用して情報発信していく予定であるようだ。

そのほか、ゴメリでの国際学会、インターネットを用いた国際キャンペーン、キエフ・ミンスク・モスクワをテレビ回線でつなぐ試み、キエフでの国際会議などが国の主導で行われる予定であるという。なお本組織は 2006 年のチェルノブイリ 20 周年を契機に国連機関が取りまとめた報告書の勧告を受け、ロシア連邦とベラルーシ共和国の非常事態省が住民のリハビリテーションに向けた積極的な支援策を実施する組織であり、今後とも BORBIC が国内のみならず、世界に向けた情報の発信と国際的連携の中心的役割を担うことを期待したい。極めて誠実な対応をされた Zoya 所長らに感謝である。



(右写真)右端より、Zoya 氏、Borisevich 氏、Danilenco 氏、Sobolev 氏。

【ベラルーシ国立医科大学】

今回の訪問ではルデノック副学長とお会いし、来年より長崎大学に留学予定のサーシャさんも同席してくださった。私のアンケート調査研究への大学としての学生対象者選抜への協力依頼を中心とし、今年夏の医科大学生 2 名及びルデノック副学長来崎の件についても確認を行った。科大学の学生を対象とした研究への協力を快く引き受けてくださった。また、サーシャさんが私のカウンターパートとして、医科大学と私との橋渡し役になってくださることになった。

【在ベラルーシ日本大使館】

松崎大使、職員の半田さんとお会いし、ベラルーシの現状等について情報交換を行った。また、松崎よりベラルーシのポポフ元国会議員（長崎の鐘プロジェクト責任者）の長崎訪問の際の市長との表敬面談についての橋渡しの依頼があった。

■サンクトペテルブルグ

サンクトペテルブルグ卒後教育医学アカデミー(SPbMAPS)125 周年記念行事

SPbMAPS は 1885 年にロシアの侯爵夫人であるエレナ・パヴロフナによって医師の卒後医学機関として設立され、現在では教授陣を含む 2000 人以上のスタッフを抱えるロシア最大の医学教育機関として医学教育、研究、臨床活動を行っている。

長崎大学とは 2005 年より交流を行っており、2008 年には学術交流協定を結んでいる。こうした経緯から今回、SPbMAPS の創立 125 周年にあたり SPbMAPS と長崎大学グローバル COE プログラムが共同で Biomedical Science に関する国際会議を開くこととなった。また、会議の翌日開かれた 125 周年式典にも出席した。

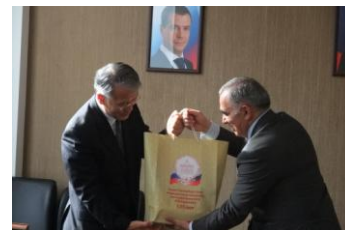


エレナ・パヴロフナの肖像画

6月10日(木)

●SPbMAPS125周年記念 生物医科学に関する共同会議

会議開始前、午前10時より SPbMAPS のオタリ学長と面会。今後の SPbMAPS の展望について話を伺い、訪問した我々一同ひとりひとりに 125 周年の記念品贈呈があった。



会議冒頭で高木副学長の挨拶、次いで山下先生より GCOE プログラムと今後の展望について、SPbMAPS の Silin 教授より SPbMAPS の概要と研究プログラムについて、さらに河野大学病院長より長崎大学病院の歴史、概要そして展望についてそれぞれ発表が行われた。

昼食後 SPbMAPS の資料館を見学。125 年間の変遷を知ることができた。



資料館で説明を受ける一行。



歴史的な文書や、以前使われていた医療器具などが展示されている。



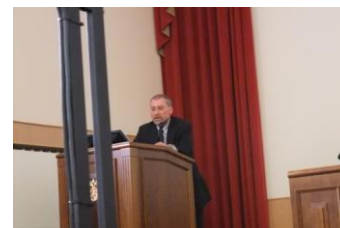
午後は、3部のワークショップから構成されていた。

第1部 Emergency Medicine: Biological and Radiological Health Risk Management

長崎からは秋田先生が難治性皮膚潰瘍に対する再生医療とリポジストロフィについて、大津留先生が緊急被ばく医療について、放射線被ばく量のモニタリング装置やシステムに関する内容発表を行った。その他、SPbMAPS から Baltrukova 教授が、現在の環境における放射線リスクマネジメントについて発表を行った。

第2部 Recent advancement of Molecular Medicine

Saenko 先生から放射線被ばくによるチェルノブイリ甲状腺がんの分子疫学研究について、SPbMAPS の Kharchenko 教授からは分子医学分野における卒業教育の現状と展望についての発表が行われた。



第3部 Infectious Diseases

SPbMAPS からはロシアにおける感染症の現状や真菌培養バンクについて、日本からは国立感染症研究所の金子先生より近年の研究内容について発表された。

研究発表後、山下教授らは関連施設に Stem Cell Bank の視察に行かれ、その後午後8時半過ぎから白夜のレストランでグルジア料理を堪能した。オタリ学長以下関係者の心温まる歓迎の晩餐会に感謝である。

6月11日(金)

●SPbMAPS125周年記念式典

山下先生はサエンコ先生と共に午前8時から医学アカデミー附属ロシア正教教会での祝福のミサに招待され、その後創立時の先人らが眠る修道院墓地を参拝された。

午前中、ペテロパブロフスカヤ教会を訪問。要塞の中にある教会である。ここにはSPbMAPSの創始者であるエレナ・パヴロフナとその娘の棺も安置されている。ロマノフ王朝の歴代の棺の由来と教会の歴史などについて詳しい説明を受けた。

12時には敷地内に設置してある大砲が打たれ、その大きな音を間近で聞くことができた。



教会内、エレナの棺の前で。



大砲の前で。

午後は医学アカデミー講堂で記念式典が行われた。オタリ学長を始め、様々な政府、アカデミー関係者や来賓からの挨拶があり、山下先生も祝辞を述べられた。祝辞の後は、SPbMAPSの歴史や活動内容のDVDが放映された。前日の会議や午前中のイベントも既に編集され映像の中に組み込まれており、今回の式典に対するアカデミーの力の入れようをうかがい知ることができた。夜は立派なホテルで記念晩餐会に出席を許され、イタリア人である核医学の先生と親交を深めることができた。

■最後に

今回、山下俊一先生に随行して先生の大学以外での現場活動の様子を間近で拝見でき、大変学びの多い経験となった。

文化や習慣、考え方の異なる国同士を結ぶことは決して容易ではないこと、先生方のこれまでの道のりの険しさ、そして、その布石の上を歩かせて頂いている今の研修環境の有難さを感じる事ができた。

また学術機関同士の交流もさることながら、それをきっかけとした都市同士の橋渡し役割を大学が担えるものなのだ、と深く感心した。もちろんそのためには、関係者の高い意識と熱意と、何よりも優れた人柄がそろってはいかならないが。

ミンスクでの生活もあと半年ではあるが、残された少ない期間でベラルーシと長崎を繋ぐ役割の一端を担えるよう尽力していきたい。

最後になりましたが、今回のような貴重な体験の機会を与えてくださった先生方、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。